

近代中国の言語意識と「日本語」

——中国留学生在が編纂した初期日本語教科書をめぐって——

南 勇

0. はじめに

近代中国で展開された一連の言語論争を顧みると、「日本語」が意外に深く関わっていることに気づくだろう¹⁾。論争の双方がそれぞれ主張する論点は如何に対立しても、論法においては同じく「日本語」を強力な論拠として取り上げ、各自の持論を立証したり、相手を反駁したりする。ということは、論争の参加者たちは多かれ少なかれ日本語を勉強した経歴をもっており、日本語に関する知識背景を共有していることを物語る。だからこそ論者たちは中国語の問題を考える際、常に予備知識である「日本語」を動員して、日本語との比較から中国語を反省し、中国語改革のアプローチを見出そうとする。明らかに、近代中国人はどんな日本語をどのように学び、理解したか、日本語勉強の実態を解明することは、近代中国の言語事情、言語意識及び言語運動を理解するための不可欠な基礎作業となるであろう。

小稿では当時中国人、特に中国人留学生たちが編纂した初期の日本語教科書を中心に、その編纂方針及び体系・形式から、近代中国人の日本語勉強の様相を明らかにするとともに、彼らの日本語に対する認識と理解のプロセスを解明したい。とりわけ当時、日本語には漢文体、和漢混交文、明治普通文、言文一致体といったさまざまな文体が並存している状況を考えて、近代中国人はなにを「日本語」と思い、自分たちが学べき「日本語」だと思ったかに焦点を当てる。ここでいう「初期」とは清朝政府がはじめて13人の国費留学生を日本に派遣した1896年から、中国人の日本留学がピークになった1905までの時期を指す。この時期にこだわるのは、当時日本では外国人向けの日本語教科書はほとんどない状

態の中で、来日した中国人は独自に日本語教科書を作らざるをえなかったからである。この時期の日本語教科書には編纂者たちの模索を如実に反映していると考えられる。

一．『和文漢読法』：漢文としての日本語

「日清戦争」の敗北以降、中国の有識者たちは「変法」（改革）のモデルを日本に求め、相次いで「日本を学ぼう」というスローガンを掲げたのである。ところがなぜ直接西洋を学ばず、日本を学ぶべきか、提唱者たちはまず人々のこのような疑問に答え、納得させなければならない。そのため多くの根拠があげられていたが、その中でとりわけ強調されたのは「同文」である日本語の容易さであった。つまり日本語は漢字を使用しているので学習しやすいから、日本に行く方が西洋に行くより効率的だ、という理屈である。日本語はどれほど易しいのか、日本留学を率先に推進してきた地方実力者張之洞はその有名な『勸学篇』で日本語は「半年習得すれば速成出来る²⁾」と書き、広西巡撫王之春も光緒皇帝に呈した、日本留学の必要性を訴える上奏文の中で「中国と日本は同文の故、通才なら三ヶ月で日本語をマスターできる」と断言した³⁾。啓蒙家梁啓超はさらに日本語は「学ばずに出来る」（不学而能）とまで言い切ったのである⁴⁾。日本語を習ったことのない彼らがそこまできっぱりと言い切ったのは、明らかにおおぜいの中国人を日本に留学させ、「変法」の人材を養成・確保したいという政治的意図からのセンセーショナルな宣伝ではあったが、しかし「日本語には漢字が十のうち八を占める⁵⁾」という「常識」から、彼らは漠然とではありながら、日本語は西洋語と比べてはるかに容易だろうと確信していたのも事実である。そうして、亡国の危機感を抱いた若者たちは、そのセンセーショナルな宣伝に煽られ、競って留学のため海を渡ったのだが、実際に日本語を学び始めてみると、日本語が意外に難しいことがわかったであろう。まさにその時期、西太后が企んだ宮廷クーデターによって日本への亡命を余儀なくされた梁啓超は、来日して間もなく『和文漢読法』を著して世に出した。さらに当時もっとも影響力のある雑誌『清議報』に載せた「日本文を学ぶ益を論ず」という論説で『和文漢読法』を紹介し、自分流の速成勉強法で勉強すれば、日本語は確実に「数日に小成し、数月に大成す」

と約束したのである。困惑中の留学生たちにとってこの教科書はまさに雪中に送られた炭の如く、ただちに大歓迎され、ベストセラーになったのである。『和文漢読法』が出版されて30年過ぎても、その影響が相変わらず大きいと、日本語が達者である周作人は指摘する。

梁啓超が著わした『和文漢読法』がいつごろ出版されたかは覚えていないが、おそらく1900年前後であろう。すでに30年過ぎだが、その影響はきわめて大きい。その書は読者に日本語を習得するよう励ます一方、人々に日本語があまり易しいと誤解させた。この影響力は今日に至っても今だに残っている。(梁任公著和文漢讀法不知道是在哪一年，大約總是庚子前後吧，至今已三十多年，其影響極大，一方面鼓勵人學日文，一方面也要使人誤會，把日本語看得太容易，這兩種情形到現在還留存。)⁶⁾

では、長期にわたって中国人の日本語勉強に多大な影響を与えた『和文漢読法』はいったいどのような教科書であるか。

日本に亡命した梁啓超は戊戌変法の失敗の反省から、自分の近代的学問知識の不足を痛感する一方、日本の明治維新が成功した秘訣のひとつは西洋から近代学問と新しい知識を大量に翻訳して吸収したことにあると悟って、来日後まず大量の書籍を読み込んだ。彼にとって日本語を学習する目的はいたって明確であった。即ち「学問語」としての日本語を通して新しい知識を吸収し、そしてそれを翻訳する。従って、彼が何よりもまず求めたのは「読む」力で、「話す」ことにはあまり関心がなかった。その意味において『和文漢読法』も日本語の学習法というより、日本「文」の読書法というべきであろう。彼の有名な「数日に小成し、数月に大成す」という保証もあくまで「読む」に限っての話である。「読む」ことと比べて、日本文を書けるようになるには半年が掛かり、「日本語」を話せるようになるまでは一年掛かると、梁啓超は言い分けた⁷⁾。つまり梁啓超は日本「語」と日本「文」を明確に分けて学習法を講じたのである。ここでは、当時の時代の流れである「言文一致」に反する言文分離という傾向さえ窺える。

梁啓超は日本「文」は速成できると確信したのだ。では彼がイメージした日本「文」とはいかなるものであったのか。戊戌変法が失敗後、西

太後一党に追われている梁啓超は、ちょうど中国を訪れた伊藤博文の手配によって日本海軍の軍艦に乘せられ、日本へ亡命した。途中、艦長は退屈そうな梁啓超にたまたま手元にあった政治小説『佳人之奇遇』を渡したが、梁啓超はこの四・六リズムにのって書かれた漢文訓読体である小説を一気に読み終え、しかも感動したあまりただちに翻訳して、日本に来てまもなく創刊した『清議報』の創刊号から連載しはじめたのだ。これは中国近代文学の発端でもあった⁸⁾。一方、梁啓超は翻訳・読書にとどまらず、身につけた新しい知識を最大限に発揮して、活発な言論活動を展開した。すると、彼の新文体も一世を風靡するようになったのである。梁啓超の新文体のモデルはほかならぬ徳富蘇峰のものであった。ということは、梁啓超が来日して大量に読書・翻訳したいわゆる日本「文」はいずれも「明治普通文」であることが分かる。明治普通文とは、明治以降に標準的な文語文として社会全般に広く行われた文体で、その骨子となるのは、幕末に行われた漢文の訓読文である。幕末-明治初年の知識人には、漢学の素養を持つものが多かったから、漢字とかなとの交用の文章を表すに、語詞・語法が漢文の訓読文に基づいたのは自然の勢であろう。明治初期からさまざまな文体が併存したが、その主流はやはり和漢交じりの特徴とする明治普通文である。梁啓超は日本の複雑な言語状況の中で、明治普通文に注目し、それを自分たちが学ぶべき日本「文」だと確信したのである。

日本語を系統的に学んだことのない梁啓超は十分ではないが、明治普通文なら読むことができた。このことに気付いた梁啓超は意識的に明治普通文で書かれた著書を探して読書したが、ちょうど梁啓超が求める著書もほとんど明治初年から二十年代の間に書かれたものばかりであった。そこで、1989年の新年、梁啓超は伊豆の旅館に閉じこもって、いままでの日本文の読書・翻訳の経験に基づいて『和文漢読法』を著わして、日本文、つまり明治普通文の速成法を系統的にまとめたのである。

実は梁啓超は「憂亜子」というペンネームで『和文漢読法』を出版したので、当時の人々は著者が梁啓超であることを知らなかったようである⁹⁾。後に彼自身が「日本文を学ぶ益を論ず」のなかではじめて自分が著者であることと基本内容などを披露して、はじめて世に知られた。従って「日本文を学ぶ益を論ず」は『和文漢読法』の「序」として読むべきであろう。実際、『和文漢読法』は早く絶版したので、後世の論者

が『和文漢読法』を論じる際、根拠になるのは主に「日本文を学ぶ益を論ず」の中で『和文漢読法』に言及した段落である。特に『和文漢読法』の速成原理に関してはそうである。

日本文には漢字が十の七、八を占める。漢字を使わず、もっぱらカナを使うのはただ脈絡詞及び助詞だけである。日本文文法は、常に実字を文頭におき、虚詞を文末に置く。日本文のそういった文法規則に従って文章を顛倒して読むべきである。学習者は常用の脈絡詞、助詞をまとめて学んで暗記すれば、本を読めるようになる。私は『和文漢読法』という本を編纂したが、学習者が読めば、あまり苦勞をせずにマスターできよう。(日本文漢字居十之七八、其専用假名、不用漢字者惟脈絡詞及語助詞等耳。其文法常以實字在句首、虚字在句末。通其例而顛倒讀之、將其脈絡詞語助詞之通行者、標而出之、習視之、熟記之、則可讀書。)¹⁰⁾

現在、われわれが『和文漢読法』について知っているのはそれだけである。しかし幸いに、他の教科書によく引用・転載されているので、そういった箇所を総合してみれば、『和文漢読法』の全体像がだいたい浮かびあがる。たとえば呉汝綸の息子呉啓孫が著した『和文釈例』は『和文漢読法』の速成法原理を具体文例で説明するのみならず、『和文漢読法』で取り上げた「虚詞」をほとんどそのまま載録している。では「和文漢読法」というのはいったいどのような方法なのか、呉啓孫は「鶏声曉キヲ報ジ」という日本の漢文をあげてその段取りを次のように説明した。

「曉」字、「報」字の後ろに付いている仮名はみな無意味で、読者は無視してもよい。文中の「ヲ」字は幹旋の詞としてもっとも肝要である。和文は大体漢文（の語順）と逆で、必ず「ヲ」字をもって語順を幹旋する。和文を読む際、「ヲ」の後ろにある漢字を「ヲ」の前にある漢字の前に移すべきである。つまり「ヲ」の後ろにある「報」字を「曉」字の前にもってくる。そうすると、「鶏声曉キヲ報ジ」という漢文は「鶏声報曉」と訳することができる。(曉字報字之和文、皆本字之尾音、無意義。凡実字下緊附之和文字、皆此例、讀者可置之不論。句中ヲ字則幹旋之詞、最要。和文多與漢文相反、其

相反之際、必用ヲ字以斡旋之、此亦定例。凡讀和文、遇有ヲ字、知其下之漢字、必當在其上一字之上也。此句キ字シ字、為曉字報字之尾音、棄之不讀。其ヲ字斡旋、當將句未報字、移於曉字之上、故譯成漢文、即為鷄聲報曉四字。)¹¹⁾

梁啓超の「和文漢読法」の原理は実は日本の「漢文訓読」から発想され、それを逆手に取った学習法である。要するに、七、八割を占める漢字、漢語を全く中国語の単語そのものとして捉える。漢字に付いた片仮名を無視してとってしまえば、日本の漢字が中国人の理解できる漢語になる。日本文を読むのにもっとも重要なポイントは「ヲ」のような文脈を指し示す「脈絡詞」としての「虚字」である。「虚字」さえ完全にマスターすれば、中国文法に従って日本文の語順を顛倒して再配列することが出来る。重要な「虚字」として『和文漢読法』は次のもの取り上げている。

セ シ ス スル スレ：「的」字、「所」字と同じ。

ナリ：「也」字と同じ。ナシ：「無」字と同じ。

ナス ナセ ナル タリ タル タレ：「的」字と同じ。以上諸字は皆「為」字の意味。

ズ ジ デ メ ザリ ザラン ザル ザレ：以上諸字は皆「不」字の意味。

アラズ ナラズ：この二字は「不」字、「非」字の意味。……

アラザリ アラザル アラザレ この三つは「非」字の意味。

アラン アリ アル アレ：この四つは「有」字の意味。

ナカル ナカラン ナキ ナケン ナク カシ：この諸字は皆「無」の意味。

シメ シム：この二字は「使」の意味。

梁啓超が変化を特徴とする語尾を「字」と捉えて、中国語の漢字に当てはめようとすることから、彼には「活用形」という概念が全くないといえよう。しかしよく考えてみると、梁啓超は日本文法にまったく無知だというより、むしろそれを無視したと考える方が妥当であろう。なぜなら梁啓超が求めるのは日本「文」を読むことで、日本「語」を話すことではないからである。読むのみならば、確かに、「報」だけ十分で、そ

れについている「ジ」などを無視しても差し支えない。しかし果たしてこのようないい加減なやり方で日本文を理解することができるだろうか。そのような疑問を予測したかのように、梁啓超は自分が提案した速成勉強法はすべての勉強者に適応するわけではないと付け加えたのである。

しかし、その勉強法は漢文に造詣の深い人に限られる。もし、漢文の素養のない人が日本文を学ぶと、必ず顛倒混乱して、中国語と日本文両方とも身に付けることができない。現在、日本文を何年も学んでもマスターできないものは、ほとんど漢文の素養の浅い留学生であろう。(然此為已通漢文之人言之耳。若未通漢文而學和文，其勢必至顛倒錯雜淆亂，而兩無所成。今吾子所言學數年而不通者，殆出洋學生之未通漢文者也。)¹²⁾

つまり「和文漢読法」で速成するのにまず漢文の素養をそなえなければならない。なぜ日本文を読むのに漢文の素養がその前提になるのか、それは一見奇妙な論理のように思われるが、梁啓超にとってそれは矛盾していない。なぜなら、彼にとってそもそも日本文は漢文の一種で、その延長線に位置づけることができるからである。

二. 『東語正規』：口語—語法体系の確立

「日本を学ぶ」という政策を実行して、1896年清政府は13人の若者を初めて日本留学に派遣した。4年後の1900年、つまり『和文漢読法』が出版された翌年、13人の中の二人唐宝鏐と戢翼翬は日本語教科書『東語正規』を出版した。この教科書は『和文漢読法』に劣らず留学生に歓迎され、広く読まれた。当時13人の中で最年少の唐宝鏐は後に早稲田大学政治経済学部を卒業後、1905年帰国し、科举に及第して進士を授けられ、全国弁護士会会長を歴任するなど近代中国を舞台に活躍したが、戢翼翬も留学生の最初の翻訳団体である訳書彙編社の重要なメンバーの一人として、『訳書彙編』の編集に携わったことで知られ、後に反清革命運動に身を投じて有名な革命志士でもある。二人とも当時の中国人留学生の中の「優等生」といえるであろう。

『和文漢読法』とほぼ前後して出版された『東語正規』は、明らかに

前者を意識して書かれたに違いない。すでに4年間日本語を勉強してきた著者は、先ず『和文漢読法』によって留学生の間にますます拡がりつつある「日本語容易論」を強く是正した。「日本の文体は数種に分けられる。普通文は漢字が五、六割を占める故に、東文を学ぶには必ず漢文に通達することを前提としなければならない」、従って「漢文、或は普通文にすでに通達した者がただ東文を学んで、読書しようとする、卒業が頗る速い」と、普通文に関しては『和文漢読法』に同調したものの、マスターするまでの所要時間を「数日に小成し、数月に大成す」という速成論に対して、「一年に小成し、二年に大成す」と大幅に延ばした。そして、普通文以外の「倭文」と「国語」とは中国語とまったく異なるから、学ぶのは至難で、4、5年以上もかかるとして、日本語容易という根拠のない噂は「学者が取るべき態度ではない」と厳しく批判したのである。¹³⁾

『東語正規』と『和文漢読法』との分岐はそれだけではない。読者の想定、学習法においても分かれる。梁啓超が想定した読者とは、自分のように漢文の素養を身につけ、近代的科学知識もある程度マスターした、成熟した「読者人」である。彼らの来日の目的は西洋の思想を吸収し、啓蒙者にふさわしい知識構造を築き、中国の変革運動を指導するように準備することにある。従って彼らの学習スタイルは独学を特徴とする読書・翻訳で、当面の急務は日本文を読むことである。しかし、『東語正規』の著者が想定していた読者とはそのようなエリートではなく、漢文の素養も備えず、近代知識も学んだことのない若者である。歴史が彼らに賦与した使命はいち早く日本語をマスターして、数学・理科・国語・歴史・体操・衛生といった中学校・高校の基本課程を学び、そして専門学校ないし大学に進学して、さらに軍事・経済・法律など中国で必要な知識を学ぶことである。したがって彼らは「独学」ではなく、日本の専門学校・大学で正規課程と教育を受けることである。しかし「日本人の先生の専門学の授業は大体洋書を参考にして、口頭で講義する」から、「東語が未熟であれば、先生が滔滔と語っても、受講者は聾者の如く、筆記しようとしてもしようがなからう」¹⁴⁾。ということは、「授業」を主な学習スタイルとする留学生たちがなにより先ず身につけなければならないのは「聞く」力、つまり先生と生徒とのコミュニケーション能力であった。著者は長い篇幅を費やして西洋教育原理を展開しながら、読む、書

く（筆記）、聞くという三つの学習法を比較して、「聞く」ことこそ語学学習においてもっとも有効な方法であることを実証しようとしたのである。¹⁵⁾

「読む」より「聞く」を重んじる著者は当然ながら日本「文」より日本「語」に重点を置き、文章より会話文を教科書全体の中心としている。著者は留学生の日常生活からさまざまな場面を想定して、会話を展開する。たとえば、

承リマスニアナタノ稽古ナサレタ日本語ハ余程規則ガアル様デスナ。

ハイ、他人ノ話スノハ私ニモ分リマスガ、自分デ話サウトスルニハマダ六ヶ敷ウ御座イマス。私ノ話ハ日本人ノ話ス様ニ出来ナイバカリデナク、又切レ切レデス。其ノ上ニ四五句一列ニ成ツタ話ハ、余程困難ヲ感ジマス。

此レハ皆アナタガ未熟カラノデス。私ハ、アナタニ御シ申シマスガ、相手ハ誰デモ宜敷イ凡ソ日本語ノ出来ルモノニ遇ツタナラバアナタハ直ニ其人ト話ヲナサイ。¹⁶⁾

初版において、著者はまだ口語と文章とのバランスを配慮して、相当の古文模範文を組み込んだが、再版の際、「古文と聊斎志異（の例文）を削除して、口語対話部分を大幅に増やした」（将原刻古文及聊斎志異刪去，増補散語甚多¹⁷⁾）と、脱漢文の「口語本位」に偏るようになったのである。

明らかに上記のような会話文は漢文の素養に頼る梁啓超の「顛倒法」では理解できず、日本語の口語語法を系統的に学ばなければならない。しかし当時の「日本には文法書しかない。語法に関する著書はほとんどないので、初学者は勉強に苦しんでいた。そこで克明に探して語法一篇をまとめたのである。また文法にも言及するので、およそ言語の規則が備わることになる。」（日本祇有文法，絶鮮語法等書，初學苦於無考證。茲特刻意授求編成語法一篇，旁及文法，凡言語之規則於是乎具¹⁸⁾）。ここで注目すべきは、日本に「語法に関する著書はほとんどない」という現状の中、著者がすでに「語法」を意識して、努めて語法編を設けたことである。しかもあくまで語法を主とし、文法を従にする。忘れてはな

らないのは、「当時は未だ口語のやっとな芽を出した時分で有名な紅葉の『金色夜叉』や蘆花の『不如帰』でも、登場人物の対話こそ口語体だが、草紙地は文語体で書いてある。教科書はもちろん文語体が多い¹⁹⁾」、つまり「口語は俗語と呼ばれ、とりわけ方言的語法は卑しまれる風潮のあった時代²⁰⁾」であったということである。にもかかわらず、留学生が口語—語法の体制を確立しようと努めていた姿勢はまさに画期的だったというべきであろう。

『東語正規』は「卷一語法」、「卷二散語」、「卷三語訣」で構成されている。その「卷一語法」の構成は以下の通りである。

卷一 語法

文字淵源	文字區別
字母原委	字母音図
字母解釈	声調
併音法	音調
変音	文法摘要
虚字	言彙
学期	学訣

さまざまな内容が混在しており、体系としてはまだ整っていないとは言えないが、「五十音図」をはじめ、口語の発音・変化規則を中心に展開したことは明らかである。『和文漢読法』で「無視してもよい」とした語尾変化は、『東語正規』において重要な「語法」として取り扱われている。もちろん「虚字」も単なる「顛倒法」のようなやり方で対応できるものではなく、その運用は極めて複雑で、用法の微妙な点において著者は無力感さえ吐露したのである。

このような語助詞に対して、初心者はまだ理解しやすいが、しかし実際の運用、変化、具体的な表現の文脈の中では、ことばで説明しきれないところがある。従って随時に会得して、はじめて体得できる。瞑想にふけて悟るとは、いわば個々人の勉強によるものだ。作者とはいえ、なすすべがない。(若此類者、初學尚易揣摩、至其運用轉換變化、用于各種語言文字中、有不可以言語形容者、是在隨

時體會，方能領悟。所謂神而明之，存乎其人，作者亦無能為力也。) ²¹⁾

一方、梁啓超においてまったく中国の漢字と同じく取り扱われた日本の漢字・漢語に対して、『東語正規』ではそれをさらに訓字、字音（漢語）、和字、国訓、新字のように細かく分類し、はっきり区別しようとした試みが見て取れるのである。

訓語：漢字語だが、音と義は中国語漢字そのものと異なる。例えば、丸裸。

漢語：中国語とほぼ同じもの。

音語：漢字漢音を借りてその意義を表す語彙である。

貯金 用心 披露 満足 洋行 放任 遠足 奉公 留学
保証 改良

新語：近世洋学が盛んな中、漢文で洋書を翻訳する際、訳せないものを漢字で独自に創案した語彙。語義は本字とまったく違う。

水素：軽気

炭素：炭気

帰納法：挙大成法、論理学語

演繹法：集一反三之法、論理学語

物質文明：有形文明、若格致等学

明らかに、『東語正規』における日本語はもはや「漢文」ではない。当時並存しているさまざまな「文体」の中で中国人が学ぶべき言語として、『東語正規』の著者は躊躇わずに口語を選んだのである。また、日本語の習得において求められている知識体系は漢文の素養ではなく、日本語の「語法」知識である。日本語を学ぼうとするならば、必ず語法から学ばなければならない。『東語正規』ははじめての教科書としてはさまざまな面において、まだ未熟であったが、口語—語法という体制を確立させたことは評価に値するであろう。

ただし、『東語正規』は口語を重視しながらも、庶民の日常会話から自然に身につけることは推奨しなかった。なぜなら、「言語は学問語があれば、非学問語もある。非学問語は即ち尋常日常の話しことばであ

る」²²⁾。あくまで近代学問知識の学習とともに、学校で標準的かつ上品な「学問語」を学ぶべきだと主張したのである。

このようにはほぼ前後して出版された『和文漢読法』と『東語正規』は中国人の日本語学習者に二つの選択肢を提示した格好になる（『訳書彙編』などといった留学生の雑誌にも、この二冊の教科書の広告がよく並べられていた）。両者の根本的な違いは中国人の学ぶべき日本語とその学習法にあった。つまり日本漢文か、それとも口語としての日本語か、また、「読む」か、それとも「話す」か、である。では、二つの選択肢を前に、当時の中国人の学習者はどちらを選んだのか、残念ながら当時の出版部数などといったデータが残されていないため把握しかねるが、周作人の上記の引用からも分かるように、後世は漠然と梁啓超の『和文漢読法』の影響力がより大きかったと考えていた。それは、当時相次いで出版された教科書に、『広和文漢読法』、『和文漢訳読本』のような、梁啓超の『和文漢読法』の書名と相似するものが多かったからである。実藤恵秀も『中国人日本留学史』で梁啓超の『和文漢読法』について言及した際、実際に取り上げたのは『和文漢訳読本』であった²³⁾。原書がなかったので似ている書名から同じ類型だろうと思い込んだに違いない。しかしこの二つの教科書は書名が類似するものの、その内容、編纂趣旨はまったく相反するものであった。

『和文漢訳読本』は実は坪内逍遙が編纂した『小学読本』をもとに翻案されたものである。『小学読本』の「編纂要旨」によると、この教科書は「話語には特に注意し、快活にして野卑ならざるものを用いて、児童の言語より漸次標準語に導かんことを力めたり」というもので、「巻の五以下、追追文章語を加えると雖も、尚も話語の文章を廃せず、七八の巻と雖も、每卷三四課の言文一致文を置き、これにより終始言語の練習の便を計り、且つ教授の変化を助けたり」であった²⁴⁾。要するに、言文一致運動の主将である坪内は『小学読本』において、意識的に言文一致の理論を取りいれて、児童が口にしやすい口語に重点をおいたのである。そして表記においても漢字を減らし、その代わりなるべくカナを使う。『小学読本』を基本的にそのまま翻案した『和文漢訳読本』も当然ながら言文一致体の「話語」を中心とした教科書になる。従って梁啓超の『和文漢読法』と違って、むしろ『東語正規』に近いといえよう。

もう一冊の教科書『広和文漢読法』は書名を『和文漢読法』にそっくり模倣しただけではなく、梁啓超の「日本文を学ぶ益を論ずる」を前書としており、宋恕が書いた「序」においても本書を梁啓超の教科書と並べて評している。しかし、編纂者は「序」のところではじめから「和文漢読法」という学習法自体を否定している。

和文をどうして漢読できるだろうか。いわゆる漢読というのは、ただ既成の言い方に附合雷同することにすぎない。凡そ動詞、形容詞などは漢字だが、語尾はすべて変化があり、和音で読まなければならない。(和文悪可漢讀哉？所謂漢讀者，人雲亦雲耳。凡動詞，形容詞等，雖寫漢字，其語尾皆有變化，語根宜讀和音。)²⁵⁾

独自の発音体系と形態変化をもつ日本語を「漢読」、つまり中国語でそのまま読むのが不可能だと解釈することは、根底から『和文漢読法』を否定することになるであろう。編纂者はそのような観点から全書を次のように構成する。「本書は91節から構成されているが、さまざまな日本文典から編集したものである。第1節から第12節までは各種の字類（品詞——引用者注）を論じ、第13節から第21節までは動詞の変化と用法を論じ、第22節と第23節は形容詞を論ずる……」²⁶⁾。明らかに品詞、そして品詞の変化形を軸として全書を構成したのである。

さらに、「日本尋常小学読本（即ち前記の『小学読本』を指す——引用者）には、文と語が半々を占めており、語法と文法が異なるところは甚だ多い」のに、「（『和文漢訳読本』の）訳者はそれを明らかにしていないので、ここで補足する」と、『和文漢訳読本』の不足点を指摘した上、文語と口語、文法と語法との相違点を注意深く説明している。いくつかの例を挙げてみよう。

- ・文法には動詞の変化は9種類ある。……語法には動詞の変化が4つしかない。
- ・文法には四段活用は6種類ある。……語法には8種類もある。
- ・文法には四つの変格がある。語法にはカ行、サ行という二行しかない。もし純粋な東京語なら、サ行の変化が異なってくる。その他、助詞、形容詞など、それぞれの変化は、凡そ文法と大いに異

なる。²⁷⁾

この教科書だけではなく、他の教科書も文語と口語、文法と語法の違いに注目して、その区別をはっきり指摘している。これは当時の留学生が編纂した教科書に共通するところでもある。例えば『日本語俗語文典』は「凡例」ではじめから「この教科書はもっぱら俗語の文法を解説するが、それは文語の文法と大いに異なる」(是書專説明俗語上之文法、與文語文法大異。)²⁸⁾と強調している。

特に注目すべきなのは編纂者たちは口語を重視しているだけではなく、すでに口語の標準語である「東京語」を意識していることである。

本書において用いた日本語は、すべて東京語を標準語とする。(書中所用日語、均以東京語為標準)²⁹⁾

以上簡単な考察から分かるように、中国人留学生を主体とする日本語教科書編纂者たちは自分らが学ぶべき日本語をめぐってさまざまに模索してきたが、そのアプローチは『東語正規』と同様に日本語の口語に着眼し、語法を中心に構成するところに集約されている。つまり『和文漢読法』と違って、徐々に漢文から口語としての日本語へ転換していき、脱漢文の傾向を鮮明にしている。

にもかかわらず、なぜそれらの教科書は読者を誤解させかねない、『和文漢読法』に似たような書名をつけたのか。このような疑問に対して『広和文漢読法』の編者は次のように説明している。

書名というのは、著書の記号である。既存の書名を使うのは、その記号がすでに人々に馴染んでいるからである。本書が『広和文漢読法』と名づけたのも、そういうことからである。(書名、書之記號也。取本有之名而名之、因其記號之熟也。此是書之所以名廣和文漢讀法也。)³⁰⁾

言い訳にも聞こえるが、おそらく無名の留学生編纂者らの真の狙いは、ベストセラーである『和文漢読法』の影響力を借りて自著の権威を樹立しようとするところにあったろう。また読者の速成の心理に迎合するど

ジネス戦略にも思える。いずれにせよ、当時梁啓超の『和文漢読法』が人気の絶頂にあったことは間違いない。一方、若者の編者たちはその人気の学習法に「ノー」と反対しながらも、その名声の庇護を求めざるをえない世相を如実に反映している。当時の日本語教科書市場は「和文漢読法」系の教科書が溢れるという虚像、そして後世から梁啓超の教科書の影響力が過大に評価している錯覚も、このような迎合文化に由来したものであろう。

1904年、弘文学院の日本語教師松本亀次郎は『言文対照・漢訳日本文典』を出版し、また同校の教員グループと共同編纂した『日本語教科書』全三巻を完成した。これらの教科書は昭和半ばまで40版を重ねて、多くの日本語学校から採用され、中国人留学生の日本語教育に多大な貢献をしたのである。換言すれば、これらの教科書はその整然とした体系から広く認められ、日本における外国人向けの日本語教育の混乱する局面を収拾し、中国人留学生の独自の模索をも終焉させたのである。では、松本をはじめとする日本人教師陣は中国人の日本語に対する認識をどこへ導いたのであろうか。

松本亀次郎の『言文対照・漢訳日本文典』は時代を先取りして口語を重視したと後世から評価されている。「彼らは日本人ならではの語感で、また、口語は俗語と呼ばれ、とりわけ方言的語法は卑しまれる風潮のあった時代に「～ッテ」、「～ッテモ」、「～ダッテ」などの「助詞」を逃さずに取り上げ、それらの用法を的確に説明している。現代の日本語テキストでさえ、こうした口語は見落とされがちであることを考えると、彼らが如何に大衆の話す口語に強い関心を示し、また、それらを外国人にわかりやすく教えることの必要性を認識していたかが窺える」。³¹⁾しかし松本本人も後に認めたように、『言文対照・漢訳日本文典』は必ずしも口語体系ではなく、どちらかというむしろ「文語」に偏っている。

この文典は言文対照とは名づけておるが文語が主で口語が従である。というのは当時は未だ口語のやっとな芽を出した時分で有名な紅葉の『金色夜叉』や蘆花の『不如帰』でも登場人物の対話こそ口語体だが草紙地は文語体で書いてある。教科書は勿論文語体が多い。随って漢文と相距る甚だ近いのである。文の主成分を為す主語客語補足

語は大体名詞であるから漢文で書いてあり、説明語も主として動詞形容詞名詞（ナリ、タリを帶ぶる者）で成り立つからそれも大抵漢字で書いてある。助動詞助詞にしても文語体は口語体より規則が簡明で漢文との比較が容易である。それだからこそこの文典を読めば大体当時の教科書は理解せられ又日本語を漢文に訳出する基準になったので、それが為当時は大いに重宝がられた次第である。³²⁾

そして、教授法に関しても、「語学教授法には、自然的教授法（直接法もこれに含まれる）と理論的教授法（文法対訳法もこれに含まれる）があり、15歳以上の教育の素養ある「中華民国留学生」には後者が適している。自然的教授法を最善の教授法として、同文同種の「中華民国留学生」にそれを強要することは、彼らの要望や心理作用を理解していないからである」と指摘する³³⁾。つまり、「同文同種」の観点から日中両言語の類似点を重視し、それを生かして授業に役に立てようとしている。その結果、当然漢文・漢語を主とし、自然教授法による会話練習ではなく、漢文・漢語の類似性によって理解させることを重視する。その意味で、松本亀次郎をはじめ、日本人教師はむしろ梁啓超の考えと「相距る甚だ近い」のである。そうして、若い中国人留学生たちの試みた「口語一語法」の模索は日本人の「権威」によって早くも挫折せざるを得なかったのである。

三．「仮名」の発見

以上述べたように、漢文に造詣の深い梁啓超は和漢調を基本とする明治普通文を日本「文」と認定して学習者にすすめた。松本をはじめとする日本人教師たちも「口語は俗語と呼ばれ、とりわけ方言的語法は卑しまれる風潮のあった時代」で、文語を主で口語を従にして、文法の理解に力を入れたのである。しかし初期に来日した中国人留学生編纂者たちだけがそういった文語を退け、口語こそ中国人習得者が学ぶべき日本語だと主張し、教科書において実践してきたのである。彼らはなぜこのような選択が可能であったのだろうか。

普通は、漢文から口語への転換は日本の言語事情における変化、つまり漢文が次第に衰退し、言文一致文としての口語が勢力を固めていくと

いう流れに起因する。明治普通文が社会で通用しなくなったので、中国人は難しい日本「語」を学ばざるをえなくなったわけである。周作人は自分の日本語学習経歴について次のようにふり返っている。

しかもその時（1909年ごろ——引用者）の日本語は、確かに分かり易かったのである。もちろん梁啓超の「和文漢読法」の時代のように、ただ転倒して読めば通じるように容易ではないが、とにかく漢字が多くて、別に制限はなかった。しかし、その後次第に漢字が少なくなり、カナが増えていく。日本の言語はもはや目で学べる「文」ではなく、耳で聞かなければならない「話」になってしまったのである……私が学んだのはもはや書籍上の日本語ではなく、現実社会で使われていることばであった。（而且那時的日本語，的確也還容易了解，雖然已經不是梁任公和文漢讀法的時代，祇需倒鉤過來讀便好；總之漢字很多，還沒有什麼限制。後來逐漸發生變化，漢字減少，假名增多，不再是可以眼學的文，而是須要用耳朵來聽的話了。……不過所學的，不再是書本上的日本語，而是在實社會上流動着的語言罷了。）³⁴

周作人が兄の魯迅と別れて、独立した1909年ごろ、日本の文体は梁啓超の『和文漢読法』に取り上げられた明治初年の普通文（例えば政治小説、徳富蘇峰の文体）と大きく異なっていたとはいえ、やはり漢字が多く、中国人が漢文の素養で充分対応できる文体であった。しかしそれから漢字が減り、仮名が増えていくにつれ、社会で実際に使われている日本語はまったく別の「日本語」に変身してしまった。従って日本語を学ぼうとする中国人も「和文漢読法」に頼れず、言文一致の現代日本語を学ばなければならなくなったのだ。

確かに大雑把にみるとその通りであろう。しかし、ここで問題として「初期」においては、「当時は未だ口語のやと芽を出した時分で有名な紅葉の『金色夜叉』や蘆花の『不如帰』でも登場人物の対話こそ口語体だが草紙地は文語体で書いてある。教科書は勿論文語体が多い」、言文一致運動が盛んに行われたとはいえ、言文一致を代表する俗語はまだ芽生えただけの段階で、社会で広い支持を得ていなかった。その一方、明治普通文は相変わらず絶対的優性を占め、漢文詩もちょうど第三

ピークを迎えていた。留学生の求める新しい知識の媒介としての著作、新聞、教科書なども明治普通文が主流であった。にもかかわらず留学生たちは明治普通文を退け、言文一致を特徴とする口語を選択したのである。それも当時の日本に「語法に関する著書はほとんどない」現状でのことであった。というのは、留学生たちの選択は漢文から口語への趨勢に流されたのではなく、時代を先取りした選択とみるべきであろう。もう一回繰り返すが、彼らにはなぜこのような選択が可能であったか。もちろんこの選択にはさまざまな要素が絡み合って、従ってさまざまな解釈が可能であるが、「仮名」の発見はもっとも重要な要素ではないかと思われる。

といって、それまで中国人はまったく仮名の存在に気付かなかったわけではない。ただし「日清戦争」を境に、中国人が日本語を注視する焦点が変わっている。つまり「日清戦争」の前まで、中国人が「日本語」といえば直ちに思い浮かべるのは数多くの「漢字」であって、仮名は漢字に付着している余計なものとして無視されがちだった。例えば1870年代から日本を訪れた中国人が書いた日本訪問記をみると、初めて日本に足を踏み入れた中国人にとって日本のすべてが新鮮・新奇だったが、その中でとりわけ彼らを驚かせたのは街のいたるところにあふれる漢字の看板であった。数多くの日本訪問記から中国人たちがそのような漢字を興味深々に観察する姿が窺える³⁵⁾。しかし、「日清戦争」以降の日本訪問記をみると、来日した中国人留学生にカルチャーショックを与えたのは次のような場面であった。即ち町、港の一角で新聞を読む人力車夫や老婆の姿である。このような光景が中国人に与えたショックは、彼らが日本の近代的工場、学校などを見学したときの感心に劣らなかったようである。なぜならこれは中国で想像もつかない光景だったからである³⁶⁾。なぜ日本は男女老少を問わず識字できるのか、来日した中国の留学生たちはまもなくその「秘密」を掴んだ。

日本語は文字と語は同じく四十八の仮名を持っている。一字が一音で、組み合わせて言をなす。そしてその言から意味が表される。二、三字で一言を成しており、あるいは五六字で一義を成す。時折七八字乃至十数字で組み合わせられるものもある。西洋のアルファベットと頗る似ている。わが国の字ごとに意味をもつことと、まったく異

なる。(日本字與語同四十八字母，一字一音，聚音成言，就言見義。或兩三字成一言，或五六字成一義，間有七八字至十數字者，頗似西文拼音之法，以視我國之每字各具其義者，判然不同矣。)³⁷⁾

今まで、漢字が多い、従って中国の漢語の一種の延長だと見なしてき日本語は、実は西洋語に近いアルファベット言語だということは中国人にとって重大な「発見」であって、そして日本語認識においての重要な転換点でもあった。そのとき中国人は、当時のベストセラーの『天演論』(即ちダーウィンの『進化論』——著者)から、表意文字の中国語は未開段階にとどまり、西洋のアルファベットこそはるかに進化した言語だという言語進化論を知り、しかも常識になっている。従って言語進化論から見ると、日本語は中国語より「進化」した言語だという結論にたどり着くのである。また、かつての「東夷小国」であった日本が日清戦争でなぜ堂々たる中華帝国を倒したかという事実にも納得がいったようである。つまり「仮名」という易しい文字が日本国民の素質を向上させ、強大な近代国民国家を作ることができたと中国人は考えている。実は「日本を学ぼう」と叫んできた近代中国人はもっとも早く日本から学んだのは「仮名」であったといえよう。「日清戦争」直後、中国の有識者は早速日本の仮名を模倣して中国語の易しい文字の創出を試みたからである。その中でももっとも広まったのが日本の仮名を真似した王照の「簡字」であった。近代中国では、日清戦争以降、中華民国が成立する1911年まで、文字、ピンイン、表音符号など数多く試みられたが、その中で最も多かったのは日本の仮名から発想された符合系統であった³⁸⁾。そこから日本の仮名が近代中国に与えたインパクトの大きさが窺えるだろう。

明らかに中国人留学生が日本語の口語を選択したのは、単なる一般言語学理論の実践でもなければ、日本で進んでいる言文一致運動の追従だけでなく、上述した中国の独特な事情、背景、体験、思考と密接に関わった必然的な選択であったろう。近代中国人の日本語思考のその背後には、いつも「中国／中国語」が存在していた。換言すれば、近代中国人の日本語の学習過程において日本語と中国語とは常に連動している。より具体的にいえば、彼らが日本語の口語を選択したことは、逆にいえば進化の低い段階にとどまっていた中国の漢文を切り捨てたことを意味する。まず中国の漢文への反省、批判、否定がなければ、当時の状況で

日本語言文一致体の口語を選択することは考えられないからである。

もちろん、中国人の一連の言語をめぐる思考は抽象的に行われたというよりも、むしろ日本語教科書の編纂、日本語の学習という実践を通して行われたといえよう。その意味において、中国人の日本語学習は中国語との比較の過程でもあって、学習者たちはそのような過程で自然に中国語に対しての反省を深めたのである。その結果、ますます既成の中国語への批判が強まり、言語改革への信念を固めていったのである。

例えば、語学の勉強において、自国語で目的語の発音を表記するのがよくとられている便宜な方法である。日本人が中国語の「你好」を「ニイハウ」と表記するのと同じだ。しかし中国人の日本語勉強にはこのような方法はほとんどとられていない。それはなぜだろう。1930年代、「日本通」と言われた周作人も同じ疑問を抱いたことがある。氏は随筆「日本話本」で、もし日本語に漢字がなければ、中国人にとってもっと学びやすかったろうと慨嘆し、東安書局出版、『中国口韻日本話本』という日本語のテキストを紹介した。その本はまさに日本語の漢字、ひいては仮名も一切表記せず、すべて中国語の発音で日本語を表記したものである。いくつか例をあげてみよう。³⁹⁾

空你知三抱你買一立馬紹。(今日散歩に行きましょう)

南信你及馬十大。(何しにきました)

奥石代古大賽 (教えてください)

周作人はこのような方法をすすめたわけではないが、漢字・漢語が多い日本語を学ぶ中国人はだいたいそれらの漢字・漢語を日本語で読まず、中国語で「理解」する習性があるから、これは中国人の日本語レベルの低下につながると指摘する。実は、初期の留学生はすでに上記のような中国語表記法を試み、日本語原文の傍に漢字で発音を示す教科書が少なくなかったのである。しかし実際の運用を通して、この方法の無理であることが浮き彫りになり、失敗に終わったのである。なぜなら、周知のように当時の中国語には標準語がないうえ、各地の方言の差異が激しく、同じ漢字でも地方、方言によってその発音はさまざまである。したがって、同じ漢字を持って日本語の発音を表記しても、方言域によって異なる発音をするからである。そこで編纂者は自分の使用する方言をあらか

じめことわっておく必要があった。「発音の表記も通用を図って、江浙発音に準じている。」(所注音係江浙口音, 易於通用。⁴⁰⁾) いうまでもなく、そのような表記に従えば、その方言圏以外の読者がどんな発音するか、想像もつかないだろう。結局、日本語の発音に関して学習者は授業で先生から直接学ぶ以外、正しい発音を学び、練習することが不可能だったのだ。明らかに、このような学習体験は習得者に中国語の現状を深く反省させ、標準語志向を一層強めたに違いないであろう。

それだけではない。中国人の学習者がさまざまな日本語文体から一つを選択することは、同時に相応できる中国語をも選択しなければならないことを意味する。或いは逆に、中国語の特定の文体の選択が日本語の相応する文体の選択につながる。例えば、当時の留学生たちは漢文調の明治普通文を退け、日本語の口語(俗語)を選択したが、当然ながらその翻訳も中国語の口語でなければならない。しかし中国語の口語は如何なるものか、当時必ずしも自明なものではない。中国では、言語改革をめぐるさまざまな議論が展開されていたが、議論にとどまっておき、実際は相変わらず伝統的な漢字・漢文の世界であった。言文一致の主張も盛んに唱えられていたものの、皮肉にもそれらの議論はすべて「漢文」で書かれていたのだ。つまり中国語では当時「口語」はまだ概念にすぎず、実在しているものではなかったのだ。そのような状況で、中国人留学生たちははじめて「白話」をもって日本語の口語に対応して、「白話」を教科書に登場させたのである。『東語正規』から会話文の中国語訳文をあげてみよう。⁴¹⁾

承リマスニアナタノ稽古ナサレタ日本語ハ余程規則ガアル様デスナ。

聽見説, 你的日本話如今學得很有點兒規模了。

ハイ、他人ノ話スノハ私ニモ分リマスガ、自分デ話サウトスルニハマダ六ケ敷ウ御座イマス。私ノ話ハ日本人ノ話ス様ニ出来ナイバカリデナク、又切レ切レデス。其ノ上ニ四五句一列ニ成ツタ話ハ、余程困難ヲ感ジマス。

哪兒的話呢, 人家說的, 我雖懂得, 我自家要説還早呢。但不過我說的不能象別人說的成片段兒, 而且一連四五句話, 就接不上了。

此レハ皆アナタガ未熟カラノデス。私ハ、アナタニ御　シ申シマ

スガ、對手ハ誰デモ宜敷イ凡ソ日本語ノ出来ルモノニ遇ツタナラバ
アナタハ直ニ其人ト話ヲナサイ。

這都是你沒有熟的緣故。我告訴你，無論他是誰，但凡見了會說日本話的，你就趕着和他說話。

「口語」に対してまだ認識が不十分な留学生編纂者は、いわゆる「上品」な漢文を徹底的に否定する姿勢から、より野卑な「俗語」を取り入れた教科書もすくなくなかったのだ。

人は体を大事にすることが一番肝要です。体を綺麗にして、汚くなくしてはいけません。顔を洗う時に前頭と顳額と額と頭の横と天邊と耳朵と耳の輪と眼と顎と頸と、後頭と喉凹凸部とを能く摩らねばいけません。湯に這入る時には、腕と手の甲と掌と手の節と親指と人指と脇の下と胸と乳と脊と腰と肋骨と下腹と腿と膝の皿と腓と脛と胯と骨と腿の骨の会陰と肛門と指の間と土不踏と指爪とを皆能く摩らねばいけません。頭の髪を度々剃り、辮髪を能く梳き、又体を綺麗にして、人と一緒に座りて話をする時、人に嫌われない様にせねばいけません。人總是要保重身體，又要幹淨，不要齷齪。洗臉時候，要把腦門子，兩太陽，天庭，兩額，辮頂，耳朵，耳輪，眼睛，下八穀，脖子，腦稍子，嗓根子，肩窩子，都要擦到。洗澡的時候，要把膊兒，胳膊肘子，手面，手心，手骨拐，大指姆頭，二指姆頭，胳膊窩，胸膛，奶子，肚臍眼子，脊梁，腰眼子，肘把骨子，小肚子，大腿子，屁股，脚指，脚板底子，指甲蓋兒，都要洗到。勤剃頭，打辮子，把身子弄得幹淨一點兒，跟人家說話才不嫌棄啊。⁴²⁾

面白いことに、日本語は規範された表現だが、中国の訳文はほとんど野卑な俗語である。編纂者は言文一致を強く意識して、東京語到北京語を、日本語の口語に中国語の「俗語」を対応させた意図が窺える。それは当時においてかなり破格な用法と言えるであろう。もちろん、より一般的な表現を取り入れようとする試みも見られる。例えばある教科書は「本書において用いた日本語は、すべて東京語を標準語とする」とことわってから、中国語に関しては次のようにその基準を定めている。

本書の日本語の中国語翻訳は、もっとも通用する普通の言語である。ただし、純粋な北京俗語ではない。すべて純粋な北京語を使うと、南方人にとって分かりにくくなるからである。(書中所譯之支那語，為最通行之普通語言，但非純然北京口吻。若全用北京口語，則對於南方人士，反多扞格。)⁴³⁾

明らかに、編纂者たちはすでに標準語の知識をもっており、努めてより標準的、規範的表現を使おうとする。ところが現実にはこのような中国語の標準語はどこにあるのか。多くの訳文から編纂者の混迷、混乱する様子が見えてとれる。

- ・ 日が短ければひまがないので、仕事を差し置かねばならん様な事が度々あります。
——天短得很，没有工夫好像常有事情搁着的様子。
- ・ この事柄は、あなたが自分でやってせねばなりますまい。
——这个事情光景要你自己去做罢。
- ・ 諸君は、筆でも鉛筆でも宜しいから、鼻、目、口、手、足を書きなさい。
——你們無論是笔還是鉛筆都可以把鼻子，眼睛，嘴，手，脚这几个字写来。
- ・ 諸君は、日本の食べ物で、何が甘いですか。
——你們以為日本菜里头，甚麼是頂好吃的呢。
- ・ 私は果物です。
——我好的是果子。⁴⁴⁾

このような「翻訳」は後世から、留学生の翻訳能力や学識のなさを非難する根拠として物議をかもした。確かに下手な翻訳だといわざるをえない。いや、そもそも正しい中国語でさえない。当時の留学生たちの学識がそれほど低下していて、正しい中国語さえ出来なかったのかと考えると、必ずしもそうではなからう。少なくとも『東語正規』の著者である唐宝鐸と戢翼翬にはあてはまらないのだ。だとすると、彼等はなぜそれほど下手な翻訳をしたのか。実は、それは「翻訳」の問題というより、むしろ「白話」(俗語も含めて)の問題だと考えるべきであろう。つま

り編纂者たちが下手だったのは「白話」であったのである。

四. おわりに

「日清戦争」の敗戦から目覚めた近代中国は、「日本を学ぼう」というスローガンを掲げて近代化を急いだのだ。当然ながら「日本」を学ぶためには先ず日本語を学ばなければならない。ところが当時「日本語」は必ずしも自明なものではなかった。なぜなら、日本語には明治普通文、言文一致文、漢文体、和漢混交文などさまざまな文体が併存していたからである。中国人が日本へ留学しはじめた1900年代ごろ、言文一致運動が次第に高まっていくものの、現実にはやはり漢文調が支配的な地位を占めていた。「東語」、「東文」、「和文」、「倭文」、「俗語」など当時中国人の日本語を称するさまざまな名称からもその一端を窺えるように、日本語を学ぼうとする中国人は先ずなにが自分たちが学ぶべき「日本語」であるかを明確にしなければならなかったに違いない。

梁啓超、そして日本人教師を含めた先駆者たちは迷わず「明治普通文」を中国人の学ぶべき日本文として定めた。漢文調を特徴としている明治普通文は、まさに梁啓超が断言したように漢文の素養さえ備えれば、学ばずとも読めるからである。梁啓超らにとって、日中両国は「同文」であって、明治普通文は実は中国の漢文の延長線にあったのだ。

しかし、初期に日本留学した若者編纂者たちは漢文調の明治普通文を退け、東京語を標準語とした口語の日本語を選択し、教科書においても口語-語法体系を確立して、「脱漢文」の志向を明らかにした。日本にやってきて、複雑な心境で日本の言語改革の動きを見守っていた彼らは、日中両国は「同文」ではなくなっていくと悟った。日本語はもはや中国漢文の延長線に位置づけられる「漢文」（明治普通文も含めて）ではなく、「仮名」を特徴とする口語（俗語）であったのだ。「仮名」の発見は、近代中国の日本語の認識を大いに変え、日中双方の言語の力関係を逆転させたのである。つまり今まで中国語の一方言として見下されてきた日本語は中国語よりも進化した「上位語」と受け止められるようになり、それは同時に中国人に対して中国語への新しいアプローチの仕方を示すものでもあった。言語進化論的見地から、表意文字の漢字は進化の低い段階に止まっているのに対して、西洋のアルファベットに近い「仮名」

はより進化した言語体系であるからである。この意味において、「日清戦争」の敗戦は、漢文が「仮名」に負けた「戦争」と理解することでもできると、中国人は考えている。

明らかに、まず漢文の否定・批判がなければ、日本語の口語を選択することはできないであろう。言い換えれば、中国人の日本語をめぐる思考は常に中国語への反省、思考と連動する。これは近代中国人の日本語習得の特徴だと言えよう。

注

- 1) 近代中国で展開された万国新語（エスペラント）、文字改革、白話と文言をめぐる論争に関して、羅志田：「清季围绕万国新語的思想論争」、『近代史研究』、2001、4；「文学史上白話的地位和新文学中白話的走向」、『近代史研究』、2002、2などを参照。
- 2) 張之洞：『勸学篇』。
- 3) 王之春：「談瀛録」卷一、『叢抄』第十帖。
- 4) 梁啓超「論学日本文之益」、『清議報』第10期、中国近代期刊彙刊、台北、1991。
- 5) 同上。
- 6) 周作人：「和文漢読法」、『苦竹雜記』、実用書局、1934、p257。
- 7) 同注4。
- 8) 松永正義：「近代文学形成の構図——政治小説の位置をめぐる——」、『東洋文化』、1978、58。
- 9) 宋恕が『広和文漢読法』につけた序「寄学速成法」には次のような一節がある。「『和文漢読法』者、不審何氏所著、庚子後頗風行。其命名、説実皆不滿於通人。」、『宋恕集』、中華書局、1993、p319。
- 10) 同注4。
- 11) 呉啓孫：『和文釈例』、作新社、光緒28年、p5。
- 12) 同注4。
- 13) 『東語正規・凡例』、作新社、1900、p66。
- 14) 同上、p67。
- 15) 同上、p14。
- 16) 同上、p45。
- 17) 同注3。
- 18) 同上、p3。
- 19) 松田亀次郎：『国語と日本精神』、白水社、1939、p58。
- 20) 関正昭：『日本語教育史研究序論』、スリーエーネットワック、1997、p38。
- 21) 同注12、p76。

- 22) 同注13、p24。
- 23) 実藤恵秀：『中国人日本留学史』、くろしお出版、1981、p338。
- 24) 吉田澄夫、井之口有一編：『明治以降国語問題諸案集成』、風間書房、昭和47、4。
- 25) 林洲髓：『広和文漢読法・序』、作新社、1901。
- 26) 同上。
- 27) 新智社編集部編：『東語完璧』、上海、光緒29。
- 28) 呉初、孟先：『日本俗語文典』。
- 29) 同上。
- 30) 同注23。
- 31) 同注18。
- 32) 松田亀次郎：『国語と日本精神』、白水社、1939、p58。
- 33) 松田亀次郎：『漢訳日本口語文法教科書』、白水社、1919。
- 34) 周作人：『知堂回想録』、『周作人文選』、人民文学出版社、1985、p209。
- 35) 19世紀70年代から訪日した中国人が書かれた日本訪問記、日記などに関して、南勇『『実録』：日本語借用語の原型——近代中国における日本語借用の原点に溯って』、『漢語教学研究』2005年号；沈国威：『近代日中語彙交流史』、笠間書院、1994、参照。
- 36) 武安龍、熊達雲：『中国人の日本研究史』、六興出版、1989参照。
- 37) 陳天麒：『東語入門』、p4。
- 38) 倪海曙：『清末漢語拼音運動編年史』、上海人民出版社、1959年参照。
- 39) 周作人：『日本話本』、『苦竹雜記』、p267。
- 40) 同注27。
- 41) 同注12、p59。
- 42) 同上、p85。
- 43) 呉初、孟先：『日本俗語文典』、作新社、1908、p48。
- 44) 同注12、p148。